

## 第1回 陽林会研修旅行 ～比叡の山を歩く～ 最澄を訪ねて

平成26年4月23日 参加者23名

「一隅を照らす、これ則ち国の宝なり」他人を思いやり、人々に希望を与えることのできる僧侶の育成を志した最澄。最澄の寺、延暦寺を参拝。諸堂を巡りました。回峰行の拠点無動寺明王堂、東塔の中心の本堂である根本中堂、西塔にある伝教大師の御廟浄土院、横川の横川中堂、それに道元禅師得度の霊跡。さらに足を延ばして、回峰行唯一、京都御所を望む「玉体杉」の聖地。延暦寺に詳しい先達に導かれての巡拝でした。



無動寺明王堂

一番最初に訪ねたのは、近畿36不動尊の26番無動寺明王堂です。智慧の仏さま「不動明王」が本尊です。「明王」とは智慧の王様という意味。お不動さまが背中に背負っておられる炎はご自身の体から出ているエネルギー「意思の力」の中に「智慧の力」が表れているのです。お不動さまが、これを背中に背負っておられるのは、火の中に生きて、火のような境地に

入っておられる「火生三昧」とのことです。回峰行は、七百日終了の後9日間不眠・不臥・断食・断水で不動明王様と一体になる堂入りの修行がありますが、このお堂で行われます。

千日回峰行は、比叡山に点在するお堂やお墓・石仏など、およそ260箇所を礼拝しながら歩きます。行者の衣は死装束を意味する白一色です。手には数珠と提灯、草履は死者と同じように部屋の中で履きます。深夜二時に



玉体杉

回峰行者の根本道場である明王堂を出発。比叡山には東塔、西塔、横川の三塔十六谷があり、そこにある堂塔伽藍を巡り礼拝します。峰峰を巡る間、道端の石仏や植物の一木一草の生きるものすべてにお経を唱え歩きます。玉体杉(ぎょくたいすぎ)と呼ばれる大木の下では、遙かに望む京都御所に向かい、国家国民の平安と平和を祈ります。峰峰を巡った後は、山を下り、麓の日吉大社などを礼拝。朝の八時に元の明王堂に戻ります。一日に歩く距離は七里半、およそ三十キロになります。



根本中堂



御廟 浄土院

最澄は、20歳の時に平安京の東北にある無名の山に登り、小さな草庵を開きました。これが比叡山延暦寺の始まりです。名は、比叡山寺としました。

奈良仏教は、単に「論」にすぎないのではないか。奈良仏教の僧侶たちは官僚化しているのではないかと。国家の庇護のもとに無為徒食の途に

成り果てている。本当の宗教とはなにかと真剣に考え、諸経、諸論、注釈書を読破し、密かに持ち続けてきた疑問を実証したいという志を持っていた。空海よりも7歳年上。18歳で得度、東大寺の戒壇院で20歳で受戒。官僧となり近江の国分寺にて修行。栄誉と俸禄を国家から請けることとなりますが、ほどなく官寺を去り、叡山に籠もる。やがて、法華経に出会い、中国の天台教学に深く惹かれるようになり、中国への留学を目論んだ。

最澄が幸せであった一つは、世間では無名の山であった日枝-比叡の山が、桓武天皇の平安遷都によって俄に脚光を浴びることになったのである。比叡山は都の鬼門の山。桓武天皇は奈良とは異なり一際大きな都をもくろみ、長岡に、やがて京都へ遷都となった。平安京の建設が始まったには延暦12年、桓武天皇は、鬼門である叡山に登っている。

平安京の東北は、これ鬼門なり。つまり叡山を指す。風水が示す「四神相応」の地なり。延暦15年大極殿が完成。その翌年、最澄の私寺である草堂比叡山寺が官寺になり、近江の国税を持って当て、最澄は仏教師範となる。唐に渡りたい。唐の天台山において完全な典籍を見たいとの願いから、802年、高雄山寺（神護寺）法華会（ほっけえ）講師を勤め、天皇より入唐求法の還学生（げんがくしょう、短期留学生）に選ばれる。

804年7月、通訳に門弟の義真を連れ、空海と同じ船団で九州を出発。9月明州に到着。天台山に登り、湛然の弟子の道邃（どうすい）と行満（ぎょうまん）について天台教学を学ぶ。さらに道邃に大乘菩薩戒を受け、儵然（しゆくねん）から禅、順暁（じゅんぎょう）から密教を相承する。805年5月、帰路の途中和田岬（神戸市）に上陸し、最初の密教教化霊場である能福護国密寺を開創する。7月に上洛、滞在中に書写した經典類は230部460巻。帰国当時、桓武天皇は病床にあり、宮中で天皇の病氣平癒を祈る。805年9月、桓武天皇の要請で高雄山神護寺にて日本最初の公式な灌頂を行い。806年（大同元年）1月、南都六宗に準じる天台宗を開宗。



道元禅師 得度の霊跡

以上が延暦寺と最澄の足跡です。我々は、ミニ回峰行を行い玉体杉から京都御所を遙拝し、最後に横川を訪れ、叡山の修行僧の一人である曹洞宗開祖、道元禅師の得度霊跡を訪れて叡山の素晴らしい宗教的情景にふれる研修であった。

岩水龍峰記 26年4月30日